

景観研究資料としての「澁沢フィルム」の今日的意義

— 韓国南部を例に —

浜田 弘明

1 「澁沢フィルム」の景観写真

神奈川大学日本常民文化研究所には、実業家であり民俗学者であった澁沢敬三らが、戦前期に各地で撮影した「澁沢フィルム」が所蔵されている。この資料には、動画フィルムも含まれるが、スチール写真だけでもその数は4000点を超える。「澁沢写真」と呼ばれるスチール写真の内容は、習俗・民具等を記録した民俗学的観点のものが中心であるが、当時の各地の貴重な「景観」を記録したものも少なくない。撮影地域は日本国内のみならず、当時、植民地であった朝鮮半島・台湾・中国東部などにも及んでいる。

海外を撮影した「澁沢写真」の中では、朝鮮半島で撮影されたものが最も多く、その数は235点にのぼる。とくに、朝鮮半島南部の蔚山（ウルサン）の写真は120点と圧倒的に多く、次いで多島海のもものが58点と続く。本報告では、1930年代に記録された朝鮮半島南部の景観写真に焦点を当て、「澁沢写真」の地理学的観点からの意義を検討することとしたい。また、これらを時間的並びに空間的（地域的）に比較する中から、「澁沢写真」の景観写真としての今日的意義についても検証を試みたい。

2 地理学的景観

(1) 「景観」とは何か

かつて地理学において、景観研究は一つの大きな領域として隆盛を極めたが、1960年代の高度経済成長期以降は経済地理学の隆盛とともに、影を潜めていった。しかし1980年代以降、景観論や風景論に関する研究は再び脚光を集め、現在では、地理学はもとより歴史学・民俗学・社会学、さらには建築学・土木工学・農学から哲学・文芸の領域にまで及んでいる。ことに、2005年4月から日本の文化財に「文化的景観」が加えられたことや、「景観法」が施行されたことも、この種の研究や論議に一層の拍車をかけている。

景観や風景・景色といった言葉は、日常生活においては同義語的に使われることが多いが、「景観」という用語は、地理学及び植物学の学術用語となっている。地理学では景観を、自然的景観と文化的景観とに別けて捉えている。前者は、人間が手を触れていない景観、つまり海・山・川などの無機質あるいは、植生等の生物的要素から構成される景観で、地震活動や地殻変動、造山運動、陸水や大気の循環、気候などによって変化して行く。一方、後者は、都市・集落・耕地など人類活動が及んだ景観で、生業・生産などの経済活動や政治的意思などによって変化していく。伝統的な景観研究では、位置・大きさ・形態・相関係数など、現象的・表面的な面から景観を考察するという方法が取られている。

今日、地球上に存在する景観の大半は、人類活動の痕跡として地球表面に刻みこまれた文化的景観であり、現在もなお変化を続けているものである。言うまでもないが、景観自らは語るものがなく、人間の側がそれをどう感じ、どう読み取るかという手続きが必要となってくるため、非文字資料としての位置付けは難しい対象の一つと言える。しかし本COEでは、この「景観」を人類文化における非文字資料の一つとして捉え、人文地理学を中心とするメンバーで、その新たな資料化と体系化に向けて調査研究を進めることとなった。

文化的景観を研究するにあたり、時系列的あるいは歴史的な時間的変化を捉えるばかりではなく、場所や

地域による違い、つまり空間的变化も同時に検討する必要がある。また景観という可視的なものから、その構成要素を取り出し、その組み立てを考える中から、いかに不可視なものを読み込んで行くか、つまり景観は、人類活動とどのように連動して形成され構成されているのか、という問題にもアプローチする必要がある。

(2) 時間的・空間的景観変化

同一地域の景観を定点観測の方法により、時代差として比較したものが時間的景観変化ということになる。日常生活の中で、毎日何気なく行ったり、通る場所については、意外とまわりの景色や風景を気にしていないものである。しかし、毎日見ているとほとんど変化のしない風景も、5年、10年と隔てて見ると、大きく変わっていることに気付く。このような身近な地域の風景の移り変わり、つまりは「景観変化」を記録し、分析することは地域の変遷を探る上で有効的な資料となり得る。

記録には、特定の場所を、同一地点から同じアングル（角度・方角）で、一定の時間を隔てて写真撮影やスケッチをする必要がある。場合によっては、博物館などでは景観模型を作製し、比較することも有効であろう。こうした方法により、同一場所の新旧の記録を比較した時、初めて景観変化の分析が可能となる。分析のためには、地形などの自然的基盤・建造物・街路網・土地割・人の流動などの景観構成要素を押さえる必要がある。その上で、景観の分布を把握し、建物景観を分類し、景観構成要素間の機能や、建物の立地条件を把握し、景観の時間的变化を見て行くこととなる。景観写真は、たった1枚の写真であっても、読み取ることのできる情報は極めて多い。単なる現象的・表面的部分のみに囚われることなく、その背後の構造をいかに読み取ることが可能かという技術的問題が、資料としての景観写真の意義付けと深く関わってくる。

ここではまず、東京から40km圏、横浜から25km圏に位置し、戦後急速な都市化を遂げた神奈川県相模原市の南部にある相模大野駅周辺を、時系列的に記録した景観写真（写真1～4）を例に、景観変化を見ることとしたい。写真1は、1959年に撮影されたもので、中央に見える電車の奥がホームであるが、駅の右側（北口）の数件の民家があるほかは、山林・畑地・原野が広がっている。この5年前に、相模原市は市制を施行したばかりで、写真当時の人口はわずかに9万人であった。写真2は、約25年後の1985年に撮影したもので、駅周辺は大きく変貌した。この間に、この地域では大規模な区画整理が実施され、林や畑地はほとんどなくなり、駐車場やビルに変わっている。それでも左奥には、過去の景観の面影としての雑木林がわずかに見える。この時の相模原市の人口は48万人で、全国でも稀に見る人口急増期を経た後で、30年間に40万人もの人口増となっている。しかし、この地域の景観変化は、この後さらに劇的なものとなる。写真3は、さらに8年後の1993年に撮影したものであるが、駅周辺にはビルが林立し、駐車場も2層化し、さらには駅ビルが建設されている様子がわかる。そして、さらに5年後の1998年に撮影した写真4では、巨大な駅ビルが出現し、景観はまさに「変貌」を遂げたと言うにふさわしい。この時の相模原市の人口は、さらに増え58万人に達している。

もしも、写真1と写真4とだけを比較したならば、誰がこの2点の写真が同一地点であると認識できるであろうか。恐らく写真2と写真4のわずか13年間の比較であっても、これが同一地点であると認識することは難しいかも知れない。つまり、都市化している地域では、景観変化を継続的に追える写真がないと、地点の特定から始まる景観写真の資料化という課題の解決に向けての作業が、極めて困難になるということが想定される。

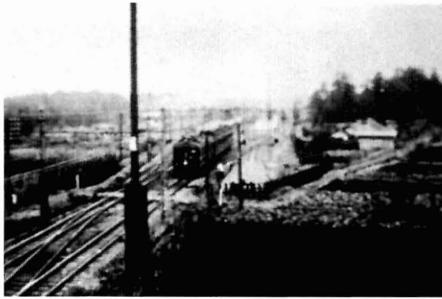


写真1 1959年の相模大野駅周辺
(南大野小学校「みなみおの」1982年)



写真2 1985年の相模大野駅周辺 (筆者撮影)



写真3 1993年の相模大野駅周辺 (筆者撮影)

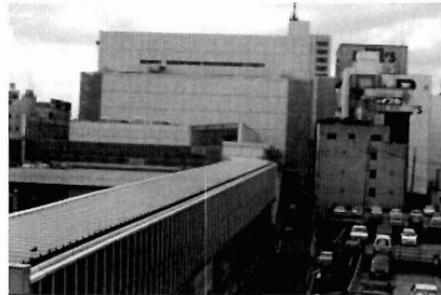


写真4 1998年の相模大野駅周辺 (筆者撮影)

(3) 景観写真としての「澁澤写真」

先に述べたように、韓国の「澁澤写真」の中で最も多いのは蔚山村の写真で、1931年8月に達里集落（現在の蔚山広域市南区達洞）において撮影されたものである。蔚山は、現在、釜山の北東約50kmに位置する100万都市である。澁澤らは、当地で45日間にも及んで現地調査を行ったとされる。当時の達里は全くの農村集落で、やや古い統計ではあるが、1916年の蔚山村（旧市街地）の人口は1.1万人であった。写真5は、達里から北東方向の蔚山旧市街地方向を撮影したもので、手前には耕地が広がっているが、この撮影地点の比定は困難を極めた。

この70年余りの間に、達里は想像を絶する景観の変貌を遂げていたからである。都市発展の上で蔚山は相模原と似た部分が多い。市制を施行したのは1962年で、当時の人口は8万人であったが、その後、1980年に人口41万人、1990年に68万人と急増し、2000年には101万人に達している。こうした変貌を遂げた中で、写真5の地域の景観は、写真6のような景観へと変貌した。2005年8月に撮影した写真6を見ると、地域は区画整理され、かつての耕地は市街地となり、奥には高層のアパート群が林立している。

この撮影地点の確定には、長年の間不動のもの、つまり自然的基礎である山という地形が決め手となった。事前に、当該地域の地形図と、複数の写真に写る山並みなどを比較し、概ねの地点を確定した上で現地に臨んだ。しかし現地には、ビルが立ち並び、地上からの景観観察はほとんど不可能であったため、特定した地点から最も近く、屋上に上がることの出来るビルを探し、そこから景観観察を行うという方法を取った。その結果、厳密な意味での同一地点の写真ではないが、比較写真として撮影したものが、写真6である。



写真5 達里の広場から北東方向を臨む
(日本常民文化研究所所蔵：SA3885)



写真6 達洞から北東方向を臨む
(2005. 8.17 筆者撮影)

写真5と写真6の2点の写真を比較すると、後方の尾根と左端の小山の形が共通していることが分かる。この小山は、標高59mほどの鶴城山で、現在は公園となっている。しかしながら、この後方の山々が、人間の手により大規模な地形改変が行われていたとしたならば、確定はさらに困難であったと思われる。

今後、この写真を地域変化の資料とするためには、相模大野の例に見るように、この間の景観変化を埋める現地写真の入手が必要となる。また、撮影地点が確定出来ない景観写真については、現地の古写真を辿り、景観の痕跡を追って行くという作業が必要となる。これらの条件が整えば、「澁澤写真」を景観資料として活用する上での利便性は、格段に進むものと思われる。

さて、その一方で、この70年間で景観がそれほど大きく変化していない地域も確認することが出来た。澁澤ら一行は、1931年8月17日から2泊3日の行程で、朝鮮半島南西部に広がる多島海の調査を行っている。写真7は、その際に荏子島（イムジャド）で撮影されたものである。手前に水田が広がり、畔道も見え、その後方に鎮里の草葺き屋根の集落が見える。さらに、その後方の山には林が見え、畑らしきものが広がっている様子がわかる。

この集落は港から程近いところにあったお陰で、地点確認が出来た写真の1枚である。ここにおいても、あらかじめ地形や集落位置を現地の地形図と照合した上で、景観観察を行った。写真8は、2004年9月に写真7とほぼ同地点から同方向を撮影したものである。この撮影地点の確定にあたっては、決め手となったのは後方の山並みである。

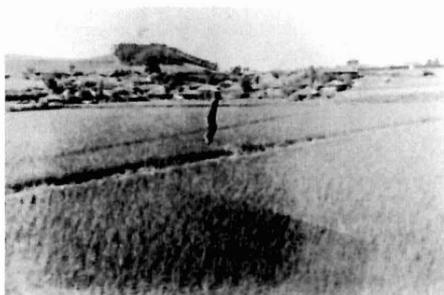


写真7 鎮里の水田と集落
(日本常民文化研究所所蔵：SA2024)



写真8 鎮里の水田と集落
(2004. 9.11 筆者撮影)

鎮里集落の周辺は、70年を経ても基本的景観の構図が大きくは変わっていないのがわかる。手前の耕地は水田から一部はトウモロコシ畑などには変わってはいるものの、耕地という土地利用自体の変化はない。また、後方の集落も草葺きのものも無くなってはいるが、基本的に同規模の集落として存在している。さらに奥の

山の頂きにも樹木は残り、名残を止めている。

しかし、景観の構成要素を細かく観察してみると、70年前にはなかったであろうキリスト教会が集落内部に建設され、民家は建替えられて藁葺きから瓦葺きへと変化した家屋も少なくない。また、70年前には無かった電柱が立ち、電線が張り巡らされている。さらに、写真には入っていないが、この撮影地点の左方100mほどのところには、スーパーマーケットが開業している。このように細かく観察してみると、景観の中に、経済生活や社会生活の変化をも読み込むことを可能とする。

3 景観写真の資料化と体系化に向けて

蔚山の景観変貌に比較して、鎮里の景観変化は、極めて小さなものであるが、都市化の影響が少ない島部においても、各景観の構成要素を比較してみると、昔の姿を止めつつ、確実に変化している状況を読み取ることが出来る。

景観変化を構成要素ごとに観察したならば、建造物は概観や素材を読み取る中から立体化・高層化・大規模化・不燃化などの視点で、街路網は形状や構造を読み取る中から直線化・立体化・拡張化・舗装化・人車分離化などの視点で、さらに土地割や土地利用は形態や作付けを読み取る中から方形化・細分化・近郊農業化などの視点で、地域の諸変化を明らかにすることが出来るものと期待される。

「澁澤写真」に含まれる景観写真は、実はそれほど多くはない。多くは、民俗的視点から道具や人物などが写されていて、朝鮮半島の235枚の写真の中では67枚、約3割を占めるに過ぎない。それでも、4000枚という総数から考えれば、1000枚以上のもの戦前の景観写真が存在するのである。

「澁澤写真」がもつ地理学的な今日的意義は、第一に、現在の景観と比較することによって、その撮影地における時間的景観変化を辿ることを可能とすること、つまり「一地域の景観の時代性を明らかにする資料」であること。第二には、同時代に撮影された各地の景観を比較することによって、空間的景観変化をも辿ること可能とすること、つまり「一時代の景観の地域性を明らかにする資料」であることである。

しかし、「澁澤写真」を資料化するに当たっての課題は少なくない。その一つは、詳細な撮影地点図が無いために、記録されている集落名から撮影地点とその方向等を丹念に確定して行く作業を必要とすることである。残念ながら写真の中には、甚だしいものになると「朝鮮」とのみしか記録されていないものもあり、作業の困難性は少なくない。

今後、撮影地点等を確定するためには、写真の中に「景観」として記録されている地形情報が最も有力な手掛かりとなる。この作業は、澁澤らの旅行行程を辿った上で、複数の景観写真を比較した中から、山や川などの自然的基盤としての地形を手掛かりに検証して行くという、膨大な手間と時間を要するものと考えられる。また、写真から民具や風俗を読み込むためには、民俗学や歴史学との共同作業も必要である。

非文字資料として写真を眺めた場合、従来の博物館資料的な見方では、民具や古文書などのような実物資料とは異なるため、間接的資料と見なされてしまう傾向が強い。しかし、少なくとも「景観」に関しては、実物をそのまま保存することが不可能であることは自明のことであり、保存の方法は模型か写真という方法に頼らざるを得ない。つまり「景観を資料化」する場合、写真こそが第一義的な実物的資料となり得るものであり、写真の中味こそを「もの(実物)」として捉え直す必要があると考える。そしてさらには、写真の背後に潜んでいる景観形成要因としてのさまざまな制度や民衆の意思といった目に見えないもの、つまりは社会的構造・政治的構造・経済的構造などをいかに探り出し、読み取るかという技術が、写真の非文字資料としての価値を高めることとなる。

[参考文献]

- 浜田弘明(1998)『『景観』を調べる』『相模原市立博物館ニュース』第9号、相模原市立博物館
- 浜田弘明(2001)「都市景観を展示するということー景観模型による現代展示へのアプローチー」『相模原市立博物館研究報告』第10集、相模原市立博物館
- 八久保厚志(2003)「景色(景観)が変わるということ」『非文字資料研究』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
- 八久保厚志・須山聡(2004)「澁澤フィルムの図像解析とその応用」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
- 浜田弘明(2004)「博物館世界に広がる景観の世界」『非文字資料研究』第6号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
- 浜田弘明(2004)『『澁澤フィルム』の景観分析とその課題ー朝鮮半島多島海を事例としてー』『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
- 浜田弘明・八久保厚志(2004)「写真資料と景観変容ー澁澤フィルムの分析に向けてー」『景観と環境の資料化と体系化にむけて』、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
- 崔 吉城(2005)「映像から見た植民地朝鮮の民俗」『季刊 東北学』第4号、東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 浜田弘明(2006)『『澁澤フィルム』撮影地の景観変貌ー韓国・蔚山を事例としてー』『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議

[写真]

- 写真1 1959年の相模大野駅周辺(南大野小学校『みなみおおの』1982年)
- 写真2 1985年の相模大野駅周辺(筆者撮影)
- 写真3 1993年の相模大野駅周辺(筆者撮影)
- 写真4 1998年の相模大野駅周辺(筆者撮影)
- 写真5 達里の広場から北東方向を臨む(日本常民文化研究所所蔵:SA3885)
- 写真6 達洞から北東方向を臨む(2005.8.17筆者撮影)
- 写真7 鎮里の水田と集落(日本常民文化研究所所蔵:SA2024)
- 写真8 鎮里の水田と集落(2004.9.11筆者撮影)